



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

5. 全学補講 (2000年度)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 慎吾 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3379

5. 全学補講

留学生センター講師 橋本慎吾

1. 2000 年度前期

1.1. 目標及び変更点

99 年度の反省点（紀要 2000 を参照）を踏まえ、2000 年度的全学補講は次の点を改め、コース運営を行なった。

(1) 医学部の通年化

これは医学部の学生にリピーターが多いことに対する対応である。半期ごとのプレースメントをやめ、前期のクラスを後期にも受講できるようにした。

(2) 岐阜大学の日本語教育における位置づけの明確化

日本語研修コースが学内公募を開始したことで、研修コースと全学補講を混同する学生や教官が多くなった。そこで、学習者のタイプ別に参加コースがわかるフローチャートを、日本語、英語、中国語版の3タイプ準備してみた。

(3) 夏季のクーラー使用

教室として使用している大学会館の教室には、クーラーのある部屋とない部屋があり、学生から勉強に集中できないとの声があった。会館の管理部門と交渉し、7 月以降、クーラーのある部屋に移動できるよう調整した。

1.2. カリキュラム

1.2.1. 時間割 1.1.2. 授業内容（教材など）

	月	火	水	木	金
1	A 窪田	D 六郷	A 藤江	D 三輪	A 六郷
	C 藤江	B 小寺	E 富田		E 加藤
2	初級特別 河地	A 橋本	専門日本語 伊藤	初級特別 杉山	D 加藤
	専門日本語 小寺	E 六郷	B 富田	B 三輪	B 野原
		C 小寺		C 河地	C 六郷
3	医学部 A 加藤				医学部 B 伊藤
4	医学部 B 加藤	医学部 C 袴田	医学部 A 袴田		医学部 C 伊藤

このコースは、ガイダンスの際に行なうプレースメントテストによってAからEの各クラスの学習レベルを決定する。以下、プレースメントの結果確定した各クラスのレベルと使用教材である。

A（ゼロ初級）：『みんなの日本語』第1課～

B（初級前半）：『みんなの日本語』第18課～

C（初中級）：『Total Japanese かいわの本2』

D（中級前半）：『中級から学ぶ日本語』1～

E（中上級）：『中級から上級への日本語』ユニット1～

初級特別：初級の場面会話。センター作成の教材を使用。

専門日本語：月曜日：「講義を聞く」を目標とした視聴覚中心のクラス

水曜日：資料を読んで発表・議論する口頭表現中心のクラス

医学部A（初級前半）：『みんなの日本語』

医学部B（初級後半）：(1) 初級文法クラス（『モジュールで学ぶ日本語』使用）

(2) 「頼む」「誘う」などの機能会話クラス

医学部C（中級）：(1) 読解クラス（『中級から学ぶ日本語』使用）

(2) テレビの医療相談番組を使った医学会話クラス

1.3. 問題点

1.3.1. 受講年齢制限について

岐阜大学の補講コースは岐阜大学の留学生を対象としているが、余裕がある場合は家族や研究者の受け入れも行なっている。「留学生の家族」という場合、通常は配偶者が該当する。これまでも配偶者の受け入れを行ってきた。ところが今期中途になって、受講者の中に、留学生の子供が含まれていることが判明した。申請書には年齢を書く欄がなく、またその子供が高校生で体も大きく、当然年齢も大学生以上なのだろうと、申請時には問題とならなかった。後日、申請書の整理の段階で、また参加クラスの講師からの指摘で、その受講生が高校生であることが判明したのである。

大学の日本語補講が高校生などの子供を受け入れることがあるのかどうか、他大学の状況について特に調査はしなかったが、岐阜大学留学生センターとしては、受け入れることは問題ではないかという結論に達し、この受講生の受け入れを取りやめ、日本語学習のできる高校を紹介することにした。

今後受け入れ対象となる「家族」の定義について議論する必要がある。例えば今回のような子供の受け入れ、また留学生の兄弟、親などは「家族」に該当するかどうか、などについて議論が必要である。また現在受け入れている「家族」は（上記を例外とすれば）全て「配偶者」であるが、この受け入れ自体にもメリットとデメリットがある。メリットは留学生に対する大きな一助となり、また心身面のケアにもなることである。留学生本人はともかく、その配偶者は目的を持って来日したわけでもなく、また言葉の壁などもあって人間関係も構築しにくい。日本語を学ぶことはそういった状況を改善するものであり、そのことによってまた留学生も安心して勉学に励むことができるわけである。しかしそういうメリットと同時に、配偶者の受け入れは、大学の、留学生センターの、正式な業務として成立するものであるかどうかについては、以前から様々な議論がある。大学としての受け入れをやめ、ボランティア団体に委託する大学もあり、岐阜大学としての対応を今後慎重に、明確にしていく必要がある。

2. 2000 年度後期

2.1. カリキュラム

2.1.1. 時間割

	月	火	水	木	金
1	初級特別 河地	D 六郷	A 藤江	A 河地	A 六郷
	C 藤江		B 富田	B 三輪	B 小寺
			専門日本語 小寺	専門日本語 伊藤	E 加藤
2	A 窪田	C 橋本	C 小寺	初級特別 杉山	C 六郷
	B 野原	E 六郷	E 富田	D 三輪	D 加藤
3	医学部 A 加藤			医学部 B 伊藤	
4	医学部 B 加藤	医学部 C 袴田	医学部 A 袴田	医学部 C 伊藤	

2.1.2. 授業内容（教材など）

以下、プレースメントの結果確定した各クラスのレベルと使用教材である。

A（ゼロ初級）：『みんなの日本語』第 1 課～

B（初級前半）：『みんなの日本語』第 18 課～

C（初中級）：『Total Japanese かいわの本 2』

D（中級前半）：『中級から学ぶ日本語』1～

E（中上級）：『中級から上級への日本語』ユニット 8～＋金曜日に読解クラスを 1 コマ

初級特別：初級の場面会話。センター作成の教材を使用。

専門日本語：月曜日：社会問題に関するニュースの視聴、新聞記事の読解から「意見を述べる」クラス

水曜日：図表などのテーマ資料を基に発表・議論を行なうクラス

医学部 A～C は通年化したため、内容は前期に準じる。

2.2. 問題点

2.2.1. 学生がゼロになったら？

今期いちばん問題になったのは、C クラスの学生がコース途中でたった一人になってしまったことであった。最初のプレースメントでは 6 名の学生が受講申請したが、帰国してしまったり、大学を辞めて就職してしまったり、怪我のため休学したり、と日本語学習以外の要因で学生が減っていき、最後には名が残っただけとなってしまった。

残った名の学生と、このままこのクラスを続けていくかどうかについて話し合い、学生は続けたいと意志を示したので、続けることとなった。対の語学学習は、大変恵まれた環境であるともいえるし、また 90 分間の緊張持続を学生に要求する過酷な環境であるという見方もできる。教師側も

そうした点に配慮しながら、半期を無事終了することができた。

こうした事態に対し、クラスの再編成をするなどといった柔軟な対応はなかなかできないのが現状である。今後課題を残す問題である。

2.2.2. 初級の進捗の問題

当初全学補講では、ABCの3クラスを初級に充て、『みんなの日本語』を50課まで終了することにしてきた。ところが最近のプレースメントではCクラスのレベルが上がり、今期のように「初中級」という位置づけになってしまうことが多くなった。それは、日本語研修コース修了生がコースを終えて全学補講に参加することも一因となっている。研修コースでは『みんなの日本語』を50課まで終えているからである。その結果、Cクラスに該当する学生が極端に少なくなる状況になりつつある。

その結果、全学補講の初級はとBの2クラスとなり、しかも現在の進捗ではBを終えても37課あたりまでしか終わらない。そのことで、全学補講の進捗は遅いと感じる学生が多くなった。

またそもそもの進捗でも、初級終了までに年半かかることになる。多くの学生が年単位で日本語学習を考えていることもあり、「初級を年で」という進捗を考える時期に来たと思われる。

「初級を年で」という進捗には別の意味合いもある。先に述べた日本語研修コースは半年で初級を終了するが、その分スケジュールは大変密である。学生のすべてがこのコースに参加できるわけではない。研究活動も忙しいが日本語も不可欠な学生は補講を受講することになる。スケジュールが密ではない分、初級終了までに年かかるが、学生は年間計画として日本語を組み込むことができる。

以上の点から、初級の学習進捗を見直す必要性がでてきた。来期以降の課題としたい。

2.2.3. 午後クラスへの要望

現在、全学補講の授業は、柳戸キャンパス開講のものはすべて午前開講である。しかし、学生によっては午前は忙しいという。ちょうど専門日本語の受講生に午後の開講を希望する学生が多かったので、今期は試しにこの授業を午後に移してみることにした。結果、多くの学生が参加した。

すべての学生のスケジュールに合わせるのは無理な話ではあるが、午前だけに授業を固め続けることは学生の参加の余地を狭めているともいえる。そこで来期以降、午後の開講を計画してみることにした。

といて、メインの授業を午後に移行するのは尚早な気がするので、まずは専門日本語などの単独コマや、学生からの要望が多い「漢字」や「読解」などの技能コマを試験的に午後を開講してみることとする。来期の新しい試みとして、ぜひ進めていきたいと思っている。

2.2.4. 研修コースとの比較（または混同）

現在岐阜大学留学生センターは、日本語研修コース、全学共通日本語日本事情、そして全学補講の三つのコースを開講している。それぞれのコースは受講資格や申請方法が異なり、また授業形態も異なる。そういった「相違点」は、センター教官にとっては厳密に区別すべきであり、また区別されているが、学生や教官にとっては重要な問題ではない。学生たちにとって大切なのは、自分の目的や時間などから考えて、どういう日本語学習が可能かということであろう。そういう観点からの情報提示を、センターはこれまで十分に行なっては来なかった。正確に言うと、行なっては来た

が十分ではなかった。

わかりやすい例でいうと、全学補講の受講説明会日程はポスター掲示などで全学に連絡される。学生の目にもつきやすく、この説明会への参加者はたいへん多い。一方研修コースの学内公募は一般に指導教官に対して連絡が行くので、ときに学生に連絡が届かないことがある。しかし学生は口コミで研修コースの存在を知っている。今期も研修コースは開催されるのだろうと考え、全学補講の受講説明会に参加してくるのである。しかし、この説明会は研修コースの説明会ではなく、学生にしてみれば、「？」という感じなのである。

一つの解決策としては、受講説明会を全学補講と研修コースの共同開催にするという方法がある。この方法は、今期の説明会で試してみた。つまり、説明会の際に、研修コースについても説明を行なったのである。そこで初めて研修コースの存在を知った学生もいたりして、結果的にはよかったが、研修コースは受講資格が補講より厳しく、例えば聴講生には受講資格がないが、この説明会で聞いたことで、受講資格のない学生も研修コースに参加できると誤解してしまうという新たな問題も生じた。

この問題は、まだ解決していない。今後の方策としては、メールを活用し、コースごとに受講案内を指導教官や学部へ送付するといった方法を考えている。しかしこれも、突然送られてきたメールが「研修コース」だったり「全学補講」だったりしても、受け取る側にしてみればどっちがどっちかよくわからないことも想像され、事態はより複雑になってしまう気もする。

地道に宣伝し、浸透するのを待つしかないのかもしれない。

3. 2001年度に向けて

最後に、来年度に向けて改善していきたい点について述べる。

(1) クラスレベルの変更

これまでメインクラスをA～Eの5レベルで行なってきたが、これを4レベルに改め、レベルの調整を行なう。

またそれに伴い、初級教材の進度を少し速め、1年間で終了できるようにする。

この進度変更によって、初級修了期間を、研修コースは半年、補講コースは1年、と明確に提示することができ、学生も自身の目的に応じた選択がしやすくなると考える。

(2) 午後にも開講

専門日本語の午後開講を本格的に行なってみる。また、技能コマを午後に開講してみることにする。

(3) プレースメントの見直し

医学部コースでは今期、通年でプレースメントを行なったが、たいへんうまく行ったのでこれを柳戸キャンパスでも実施してみることにする。例えばAからBなどの連続したクラスは、先期の受講状況を見て、そのまま上に上げられるシステムを考える。この方法によってプレースメントが簡素化され、1年単位でまとまった学習環境を提供できるようになると考える。